The Japan Society of Educational Sociology

書評

門脇厚司・陣内靖彦　編
『高校教育の社会学—教育を蝕む＜見えざるメカニズム＞の解明—』*
門脇厚司・飯田浩之　編
『高等学校の社会史—新制高校の＜予期せぬ帰結＞—』**

神戸大学　川嶋 太津夫

I

編集部より書評を依頼されたのは，門脇厚司氏を中心として1983年に発足した「高校問題研究会」のメンバーによる共同研究の成果2冊である。当研究会は，神奈川県の新設高校の継続調査を初期の目的として設立された。いわゆる「神奈川方式」と呼ばれる選抜方式，つまり学習成績（内申）が50%，2年時の学習検査（アチーブメント・テスト）が20%，そして学力検査（入試）が30%という中学校在籍中に既に選抜の70%までが決まってしまう選抜方式のもとで，新設高校へ入学してくる生徒はどんな特性を有しているのか，彼らは3年間の高校教育によってどのように変容するのか，また新設高校は高校階層構造にどのように位置づけられていくのか，そしてこの階層構造上の位置づけは，以後入学してくる生徒の質をどのようにして固定していくのか，さらにまたこの過程の中で教師集団は授業や生徒指導の仕方をどのように変容させていくのか，などの問題を設定して4年間にわたって継続調査を行った。その成果をまとめたものが『高校教育の社会学』であり，その中では高校階層構造秩序内では最底辺に位置づけられる新設校や工業高校など，受験偏重の教育，高校間格差の固定化，不本意入学者の増加，無気力化や怠学の昂進，中途退学者の増加といった現代の日本の高校教育が抱える問題が集約して存在するいわゆる「教育困難校」をフィールドとして，教育の場を支配している「見えざるメカニズム」，つまり，生徒の勉学意欲を減退させる見えざるメカニズム，教師の熱意や努力を徒労に終わらさせる見えざるメカニズム，知らず知らず生徒への指導を強化させていく見えざるメカニズム，そして教師と生徒たちをしてともに学校でさほど苦痛を感ずることなく時間をやり過ごさせる見えざるメカニズム，などを顕在化させることが試みられている。

たとえば，ある新設高校では，教師の生徒認識と生徒の教師認識とのずれと，前年度の生徒実態に合わせて修正・計画される対処的・予防的な教育指導とから，入学してくる新入生は，年々その学力も向学校的傾向も高まっているにもかかわらず，どの年度も2年次になると教師や学校に対する評価が悪化し，しかも一定の数値付近に収束するという「悪評価の収束現象」の発見や，高校階層構造上低位にランクされる高校に「輪切り選抜」で配分された「同質的な」生徒たちは，互いを「鏡に映った自己像」として

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

マイナス（負）の評価をし合い，それによって自己をも悪く評価する循環プロセスの中で自信，自尊心，意欲をますます低下させていくという「相互悪評効果」の指摘などは，「見えざるメカニズム」の顕在化の試みの一例といえる。したがって，本書は，日本の教育社会学研究の伝統の中で比較的手薄だと考えられてきた「学校効果研究」とくに学校内の「プロセス」や「スルー・プット」の解明を試みた著作として評価できる。

さらに，神奈川県の新設高校等をフィールドやケースとして継続調査を推し進めるなかで，個々の「組織」としての高等学校が抱える問題を的確に把握し，問題の発生してきた経緯や，その根源を問うためには，1948（昭和23）年4月に発足して40年（研究会発足時）を経た「制度」としての新制高等学校が，時代の変化とともにその姿や中身を変えて来た過程をしっかりと把握する必要性を感じた編者らが書き著したのが『高等学校の社会史』である。1948年にスタートした新制高等学校は，後期中等教育の単一・一元化（総合制・男女共学），教育機会の均等化（定時制・学区制），そして希望者全員入学を基本的理念としてその歩みを始め，この40年間に学校数は1.5倍に，生徒数は4.5倍に増加し，進学率も43%から94%へと上昇した。その意味で，当初の理念のいくつかは現実化している。しかし同時にいくつかの深刻な問題を生み出していることも事実である。高等学校の序列化，不本意入学生や中退者の急増，勉学意欲の減退，生活指導や校則の強化といった管理教育の跋扈，教師―生徒関係の希薄化や疎遠化，高校教育の目標・理念の拡散，公認されざる教授法の蔓延など，現在の高校教育の抱える問題は尽きない。経済発展を達成するために，より教育水準の高い国民教育を追求するプル要因としての国や行政側の動きと，より安定した生活を我が子に保証してあげるために一層上級の教育を求めたプッシュ要因としての国民の教育要求との相乗効果として，今日，高等学校教育は事実上義務教育化している。それぞれの要求は正当な要求であり，なんら非難されるべき点はないにもかかわらず，結果として現在の高校教育は多くの矛盾や問題を抱えている。筆者らによると，それは40年間という短時日で急速に高校教育が量的拡大を遂げた結果もたらされた質的な変化，つまり「制度の予期せぬ帰結」である。新制高校の理念が形骸化する過程，量的な拡大がもたらす高校教育の質的な変化，定時制高校の劇的な変質，入学試験制度の変遷，変容する教師と生徒の意識，そして高校を見る社会的視線の変容など，本書は，従来からあった特定の高校の歴史（ライフ・ヒストリー）ではなく，制度としての新制高等学校の歴史を描こうとする立場が堅持されており，まさしく「制度の歴史としての社会史」（P. Abraham, *Historical Sociology*）と呼ぶにふさわしい著作といえる。

両書とも，「見えざるメカニズム」と「制度の予期せぬ帰結」を顕在化しようと試みており，「暴露の学問」としての社会学の面目躍如たる著作に仕上がっている。しかしながら，それぞれ8名（『高校教育の社会学』）と7名（『高等学校の社

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

会史』）という多数の著者が執筆しているので，個々全ての論文について詳細な批評を加えることは評者の能力を越える課題でもあるし，また紙数も限られているので，それぞれの論文の吟味は読者諸兄に委ねることとして，参考までに以下にそれぞれの構成を記すに止め，書評という課題からは逸脱するかもしれないが，この2書を「資料」として，評者なりに新制高等学校の40年間を分析するための視点を試（私）見として提起しながら，両書を読み解いてみたい。

『高校教育の社会学』

第1章　高校教育の現状と問題
第2章　高校教育現場の実態と問題点
第3章　高校階層構造形成の社会的基盤
第4章　高校格差と大学進学規定の構造
第5章　教師―生徒関係固定化のメカニズム
第6章　高校における相互悪評効果
第7章　非進学校教師の教育行為
第8章　非進学高校生徒の勉学意欲と教育効果
結　章　高校教育再生のための三つの提案

『高等学校の社会史』

第1章　新制高等学校の理念と実際
第2章　高等学校の量的拡大と質的変化
第3章　定時制高校の変容と現状
第4章　高校入試制度の変遷と問題点
第5章　高校教師の質的変化
第6章　高校生にみる在校意識の変質
第7章　高等学校をみる社会的視線の変容

II

その視点とは，新制高等学校の歴史を著者達が指摘しているように，新たな「社会制度」の成立の過程，すなわち高等学校教育の「制度化」の過程として理解する視点である。バーガー夫妻によれば，「制度」には1）外在性，2）客観性（自明性），3）強制力，4）道徳的権威，5）史実性が特徴として備わっているという（『バーガー社会学』）。戦後の半世紀の間に，日本の新制高等学校は，我々一人一人が好むと好まざるにかかわらずいたるところに存在するようになった（5500校以上（1992年現在））。また，それは中学校でもなければ，大学でもない。我々が太陽を太陽以外に呼びようがないように，高等学校は高等学校としか呼べない。義務教育ではないにもかかわらず，100人の中学校卒業者のうち96人までが高等学校へ進学し（1992年），進学しない者は社会的，経済的に不利益を被るだけでなく，同級生よりも一足早く社会人として一所懸命その責を果たしているにもかかわらず，高校へ進学しなかったことで自らを恥じ，時には罪悪感を抱くことすらある。そして，過半の日本人が生まれる以前から高等学校は存在し，21世紀に入っても高等学校はずっと存在し続けるであろう。

しかし，戦後新たに生まれた新制高等学校という「制度」は，まったくの白紙の状態から成立してきたのではなかっ

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

た。筆者らも指摘するように，普通教育を大学進学のための教育と同一視し，専門教育よりも一段と上位にみる中等教育観と，教員の供給のほとんどを「教養人」としての旧制中等学校教員からの移籍に頼るという状況の中で生み出されたのである。いわば，新制高等学校は，高等教育進学準備機関としての戦前の旧制中学校・高校の「遺伝子」を「刷り込まれた」状態で誕生したのである（A. L. Stinchcombe)。したがって，制度を取り巻く様々な環境がこの半世紀の間に大きく変化しているにもかかわらず（もっとも顕著な環境の変化は進学率の上昇である)，制度としての新制高等学校には発足当時の様々な構造がインプリントされて残存している。ここに現在の日本の高等学校（教育）が抱える諸問題の根が存在する。

たとえば，旧制中学・高校の伝統を受け継いで高校生には大学進学という文化目標が一様に強調され，高校には大学進学準備機関としての制度的役割が「チャーター」として付与される一方で，実際の大学進学機会が平等に全ての生徒，全ての高校に配分されているわけではない。筆者らが何度も強調するように，実際の大学進学機会はハイアラーキカルに配分されているのである。そこで，このように有力な成功目標が強調されながら，一方でその目標達成の制度的手段が不平等に配分されている状況下では，R. K. マートンが指摘する様々な適応形式が存在することになる。目標も手段も承認しているのが，いわゆる「進学校」に多くみられる受験勉強にせっせといそしむ「模範的」な高校生であり（「同調」)，大学進学という目標は承認しても，それを達成する制度的手段を拒否しているのが大学入学資格検定受検者や裏口入学者であり（「革新」)，筆者らも指摘しているように非進学校では，大部分の高校生は，大学進学の目標は放棄し，受験戦争から「おりて」はいるが，しかし教師や親との争いごとは避けるべくうまく「高校生している」（「儀礼主義」)。そして，底辺校と呼ばれる職業高校や定時制高校では，大学進学という目標のみならず，それを達成する制度的手段としての高校の存在をも拒否して，生徒は不登校になったり自主的に中途退学していくか（「逃避主義」)，あるいは教師に暴力をふるって退学に追い込まれていく（「反抗」)。

Ⅲ

このように2書を新制高等学校に関するいわば「資料」として「制度」「制度化」の観点から新制高等学校の40年間の歴史と現状を整理してみたが，書評者という役割期待にあまり同調してこなかった点を反省して最後に1，2疑問に感じた点を指摘しておきたい。

その1つは，制度としての高校教育の「(相対的な）自律性」の問題である。『社会史』の第1章ならびに第2章では，新制高校がこの書評の冒頭にあげた発足当時の理念を大幅に変容させ．その教育課程を多様化させ，また階層構造化したのは，産業・経済や大学入試制度に従属した結果であることが過度に強調されているように感じられてならない。「制度」としての新制高等学校は，それ独自の論理

NII-Electronic Library Service

The Japan Society of Educational Sociology

で教育像を示すことはなかったのであろうか。産業界，経済界，あるいは大学入試や大学教育，中学校教育に逆に大きな独自の影響を及ぼすことはなかったのであろうか。戦後の半世紀の間に，少なくとも新制高等学校は，現代の日本人のライフ・コースの中に「高校時代」という1つの人生段階を制度化させたし（「高校3年生」という流行歌さえ生み出した），また，「高校卒」という学歴を有する一群の人々（日本人の学歴構成からいえばマジョリティ）を社会の中に形成した。「制度」としての新制高等学校が一人一人の日本人や日本の社会に与えた影響は極めて大きいと考えるのであるが，この点に関する分析を筆者らに今後期待したい。

2つめは，複数の著者による論文集の弊害といってしまえばそれで終わりなのであるが，新制高等学校の発展段階の時代区分や「神奈川方式」の説明が何箇所かで重複してなされており，またそれが微妙に食い違うことも見受けられたので，どこかに統一して表にでもして掲載されているとより一層理解しやすかったと思われる。

そして最後に，揚げ足とりと非難されるかもしれないが，あえて文章表現上気になった箇所をいくつか指摘したい。『社会史』第3章に「…この頃より，東京都における定時制進学者の多くが（傍点引用者），全日制不合格者で占められるようになる。…（中略）…これに対して，『全日制に不合格であったから』とする生徒が19.6%と，ほぼ5分の1を占めている」とあるが（p.121），果たして「5分の1」は「多く」と言えるのであろうか。ちなみに手元の辞書を引くと「多く」とは「たいてい」「おおかた」と説明されていた。論文の論旨に引っ張られた過剰な表現と言えるのではなかろうか。また不適当と思われる表現としては数ページ後に「…全日制進学率が東京で90%を越えた1970年以降になると中卒就職者のなかの訓練可能性（トレイナビリティ）を持った者の割合が少なくなり，質の低下は否めない」（p.124）とあるが（傍点引用者），あたかも生徒を粗悪な工業製品のようにしか考えておらず，生徒に対する教師の見方としていかがなものであろうか。さらにまた，『社会学』の第3章で筆者は，「…生徒も教師には，敬語を用い，尊敬の念を持った態度で接する。こうした良き生徒と教師の人間関係は，今日では，少数の伝統的進学校でしか望むべくもない」（p.51）とし，「…高校時代なればこそ，青春の若さを燃焼しつくし，潑剌としたもっとも理想的な高校生活をどう送るべきかという，高校生らしい発達課題の達成へ向けた努力がはじまるはずである（傍点引用者）」（p.53）と嘆いているが，本書はあくまでも客観的な分析を目指す社会学の研究書であり，教師としての日頃の不満を慨嘆するのが目的ではないはずである。見方を変えれば，このような表現が研究者や教師の口から自然と出てくる事実こそ，先程指摘したように発足時に「インプリント」された戦前の旧制中学・高校の学校観・生徒観が現在も高校教育を支配している証左にほかならず，いかに「制度」の拘束力が強いかを如実に示しているといえる。

NII-Electronic Library Service